

ダイアログジャーナル (DJ) を用いた中学生の英語ライティング指導

— 英文産出スキル向上をめざす授業実践 —

鈴木 克彦

はじめに

ダイアログジャーナル (以下 DJ) は、対象言語による指導者との対話的な日記を継続的に行うことで書く面での文産出力を高める目的をもつものである。アメリカでは、成人移民とその子の ESL としての英語教育に利用されてきた。DJ は異文化の中で一方的に与えられる教材をこなすのとは違い、実生活の中での悩み、問題、喜びなどを不自由な英語ながらも教授者にストレートに表現できることから、効果的な指導法として広く定着しつつある。

筆者は DJ による人間性を重視する語学指導に共鳴を覚え、EFL 状況下でも日本人英語学習者の英文産出スキル形成に寄与するものが大きい指導法であると考えた。特に DJ 指導の継続性の効果が大きいと予測し、年間の指導計画に取り入れた。対象は英語学習を始めて間もない中学生であるが、その理由は一定の読み・書きのスキルを修得した後、初歩の段階から自己表現活動を習慣化する必要があると判断したからである。

英文産出スキルは accuracy (文法的正確さ)、fluency (英文産出量)、content (内容、伝達) の3点から構成されるものと定義し、DJ 指導によりこれらの能力がどのように変化したかを筆者自らが直接指導に関り、アクションリサーチとして検証したいと考えた。通常の心理学の研究手法と異なり、本研究は指導法の効果を検証しつつその問題点を改め、指導法の改善を探索していくことに重点を置いた研究であり、教育の実践現場に必要な知見や教育技術を向上させることを目的としている。

研究は1年間を通してのものだが、第1期(平成14年4月～9月)と第2期(同9月～平成15年3月)の二期に別れる。二期に分けたのは、第1期での反省を踏まえた指導方法の変更の余地を得るためである。

研究1 (第1期: 中学2年生を対象とした DJ 指導)

「書く」技能は、聞く・話す・読む・書くの4技能のうちでも獲得の難しいものとされている。話す・書くという英語産出技能は実践的コミュニケーションでは正確さを追求する言語操作能力だけではなく、多少の誤りがあっても即興性(improvisation)などコミュニケーション能力が要求される。従来の学校での英語教育では、この点が重要視されておらず、fluency を伸ばすことを主眼とする指導方法の開発が必要と思われる。

長期に渡り継続的な DJ による自己表現活動を行うことで、英作文産出スキルを構成する下位構成能力である accuracy, fluency, content が、DJ 指導によってどの能力に影響を与えるかを筆記によるプレテスト、ポストテストを実施して、これらを測定した。

対象者は国立 A 中学校 2 年生 80 名(男 40 名、女 40 名)を DJ 群 40 名、通常群 40 名とした。

プレ・ポストテストの採点結果について時間(事前-事後: 被験者内要因)×群(DJ 群-通常群)の2要因分散分析を行ったところ、fluency において交互作用が見られた($F(1, 74) = 4.467; p < .05$)。また、時間の主効果は全ての指標について見られた(fluency: $F(1, 74) = 164.24; P < .001$; accuracy: $F(1, 74) = 25.56; P < .001$; content: $F(1, 74) = 119.53; p < .001$)。そこで、fluency の得点について単純主効果の検定を行ったところ、事後における群の単純主効果($F(1, 148) = 4.358; p < .05$)、通常群における時間の単純主効果($F(1, 74) = 57.265; p < .01$)、および、DJ 群における時間の単純主効果($F(1, 74) = 111.439; p < .01$)が見られた。

この結果から、fluency において DJ 群の得点が通常群の得点に比べてより大きく上昇したことが示唆される。

研究2 (提出高群と提出低群の比較)

研究1ではDJ指導をクラス単位で行うことで、その集団のライティング能力のうち fluency が統計上有意に伸びたことが明らかになった。しかし、DJ の提出状況(全12回)を見ると、毎回提出した生徒と提出状況の悪い生徒との差が大きかった。提出高群と提出低群間に、ライティング能力の伸びの違いがあると予測される。

そこで9回以上提出した生徒群を提出高群($n = 26$)とし、5回以下の生徒を提出低群($n = 14$)とし、writing 能力の伸びの差をプリ・ポストテストの結果で比較することにした。

その結果、プレ・ポストテストを提出高群、低群で比較すると、3項目とも平均点はポストテストで上昇している。そこで3項目について各個人の伸び(プレテストとポストテストの差)に注目し、差の平均を計算した。これらの各項目ごと、提出高群と提出低群の伸びについてt検定を行ったところ、いずれの項目も有意差は認められなかった。(両側検定: fluency: $t(38) = 1.19, p$

$> .10$; accuracy : $t(38) = .19$, $p > .10$; content : $t(38) = .32$, $p > .10$

研究3 (授業内 DJ の取り組み)

研究1では授業外の自主的な DJ 活動の結果, fluency の向上が見られたが, 研究2では提出高群と提出低群のライティング力の伸びに差はないという結論が得られた。そこで DJ 指導そのものがすべての生徒の fluency の向上に効果的であるのかという疑問を払拭できない。DJ の本来の目的からすると生徒の自主性に全面的に任せるべきだが, 学習を確実に成立させるために学習者全員に提出を義務化する必要性が生じてくる。一定の提出状況を確保したうえで fluency の伸びがあるかを検討した。

そこで第2期(9月~2月)では宿題という形にはせず, 授業時間内で処遇することにより, 毎回確実に提出できる状況を設定し, DJ に書かれた英語の語数 (fluency), の変化を中心に検討する。対象者は研究1で対象となった中学2年生80名であった。

第2期では合計30回の授業内 DJ 指導を行い, 時間の経過とともに書かれた語数変化を毎回記録し80名全員の語数の伸びを比較した。授業内 DJ での30回の DJ 活動を5回ずつで1つのステージと見なし, 計6つのステージごとに生徒が DJ に書いた平均語数を算出した。6ステージで生徒が書いた英語の平均語数を被験者内(6水準)一要因分散分析を行った。その結果, 回数と共に英作文の語数が有意に伸びていることが見いだされた ($F(5, 380) = 42.111$, $p < .001$)。従って, 長期に渡って継続した授業内 DJ を行うことで, 英文産出量が次第に大きくなると言える。

研究4 (生徒の DJ 評価)

第1期授業外 DJ 指導に対する生徒からの評価を得るために質問紙を用いて5件法により DJ を生徒に評価させた。この質問紙を使って DJ 指導を始めて1週間後に1回目を, さらに DJ 指導が終わった直後に2回目を同一質問内容で生徒による評価を調査した。

1回目の調査と大きな変化があった回答は「日常生活の中で, Journal に書くことはないかと思うときがある。」である。1回目が3.5に対して, 2回目は3.0という評価に下がった ($t(34) = 2.34$, $p < .05$)。トピックを選ぶことは生徒に負担であったようだ。

また提出低群の生徒になぜ提出が滞るのかをインタビュー

をしたところ, free writing は非常に英語の学習に役立つと思うが, 書く内容がみつからなかったり, 怠けてしまったりして続かないということであったり, 授業内で DJ を行う時間を作ってくれたら, もっと書けると言うと話した。

研究5 (高校生の DJ との比較)

筆者は中学の DJ と併行して, 高校2年生 ($n = 31$) の選択ライティングクラスでも DJ による同様の指導を行った。第1期 DJ 指導の前後に中学と同一のプレ・ポストテストを行い, 同一条件で採点を行った。学習進度の差や発達段階の差が DJ 指導を行うことで, 英語作文能力の形成に中学生, 高校生どちらにより効果があるのかを検証した。対象は研究1で対象となった第1期の中学2年生 ($n = 40$) と高校2年ライティングクラス生徒 ($n = 31$) である。

中学生, 高校生を群の要因とし, accuracy, content, fluency の3つの英作文の能力をプレテスト, ポストテスト(時間の要因, 2水準)で測定した得点(10件法)を2要因分散分析を行ったところ, accuracy に関しては, 時間の主効果 ($F(1, 69) = 12.481$, $p < .01$), 群の主効果 ($F(1, 69) = 5.980$, $p < .01$), 時間×群の交互作用 ($F(1, 69) = 4.044$, $p < .05$) の全てが有意であった。content に関しても, 時間の主効果 ($F(1, 69) = 47.907$, $p < .001$), 群の主効果 ($F(1, 69) = 31.503$, $p < .001$), 時間×群の交互作用 ($F(1, 69) = 22.724$, $p < .001$) の全てが有意であった。fluency に関しても, 時間の主効果 ($F(1, 69) = 82.144$, $p < .001$), 群の主効果 ($F(1, 69) = 24.258$, $p < .001$), 時間×群の交互作用 ($F(1, 69) = 16.196$, $p < .001$) の全てが有意であった。

約6ヶ月の DJ 指導で, 中学2年生のライティングの力の伸びが accuracy, content, fluency の3分野に渡り高校生の伸びを上回るものであった。

今後の指導への示唆

1年間の DJ 指導を通じて得られた授業評価より次の5点に関して, 今後の指導への示唆として言及したい。

- 意味に注意を向ける指導の重視
- 継続的に書かせることの重要性
- 誤りへの対処
- DJ 指導が向く生徒, 向かない生徒
- DJ 指導の教師側の問題と実施にあたって